



第6回 日本不安障害学会 学術大会

「研究と実践の発展的融合
～基礎から臨床・職場・学校まで」

会期 2014年2月1日(土)・2日(日)

会場 東京大学 伊藤謝恩ホール・
山上会館 (本郷キャンパス内)

大会長 佐々木 司 (東京大学大学院教育学研究科健康教育学分野)

副会長 鈴木 伸一 (早稲田大学人間科学学術院)

事務局長 菊地 裕絵 (国立精神・神経医療研究センター)

抄録集



成人におけるパニック障害と発達障害

高塩 理

昭和大学医学部精神医学講座

発達障害にまつわる不安の研究は、数多く認める。特に小児期や思春期など成人前の発達障害を対象とした研究を概観すると、不安（また不安障害）の併存率はおおよそ4割程度であろう。一方で、成人を対象とした発達障害にまつわる不安の研究について着目すると、その報告は少ない。特に、社交不安障害、また DSM-IV-TR 以前には不安障害の範疇であった強迫性障害などの併存に関する研究数と比較して、パニック障害と発達障害の併存に関する研究は、ほとんど見当たらない。このことは、パニック障害と他の精神障害の併存に関する研究数と比較すると、驚きである。実際、成人を対象としたパニック障害専門外来を振り返ると、成人におけるパニック障害と発達障害の併存ケースは、少ない印象である。発達障害と診断された子供が成人してからパニック障害を発症し併存するケースも、十分に考えられるはずである。未成年の発達障害は大人になるとパニック障害は併存しにくいのか、発達障害では不安の表現型が異なるのか、併存の可能性を検討していない診断技術の問題なのか、また併存ケースはどんな特徴があるのか、など大変興味深い疑問を多角的に検討し、成人におけるパニック障害と発達障害について理解を深めたい。